

Kim Fupz Aakeson 作品における父親と息子の関係について

デンマーク語専攻 浅妻夏香

目次

1. はじめに
 2. 作者紹介
 - 2.1. 作者略歴：Kim Fupz Aakeson
 - 2.2. 著作と創作活動について
 3. “Læreplads” 「研修所」
 - 3.1. 作品紹介
 - 3.1.1. 作品概要
 - 3.1.2. あらすじ
 - 3.2. 作品分析
 - 3.2.1. 内容分析
 - 3.2.2. 父親と息子の関係について
 4. “Raftehegn” 「垣根」
 - 4.1. 作品紹介
 - 4.1.1. 作品概要
 - 4.1.2. あらすじ
 - 4.2. 作品分析
 - 4.2.1. 内容分析
 - 4.2.2. 父親と息子の関係について
 5. “Skitur” 「スキー旅行」
 - 5.1. 作品紹介
 - 5.1.1. 作品概要
 - 5.1.2. あらすじ
 - 5.2. 作品分析
 - 5.2.1. 内容分析
 - 5.2.2. 父親と息子の関係について
 6. 縦断的な考察
 7. おわりに
- 使用テキスト
参考文献
インターネット上の資料

要約

本論文は、キム・フオップス・オーケソン(Kim Fupz Aakeson)の短編作品を読み、彼の描く父親と息子の関係について考察したものである。今回扱ったのは"Læreplads"「研修所」、"Raftehegn"「垣根」、"Skitur"「スキー旅行」の3作品である。これらは10代の少年が主人公で、父親との関わりが描かれたものである。

第一章ではまず、本論文における研究目的とその方法を述べた。それぞれの作品についてテーマを分析し、その後3作品を縦断的に考察するという本論文の大まかな流れを示した。第二章では、オーケソンの略歴と著作、作風を紹介した。デンマークにおいて多方面で活躍しているが、本論文では小説家としての一面にフォーカスすることとした。

第三章から本論に入り、まず「研修所」について作品概要とあらすじを簡潔に示し、作品分析を行った。この作品は、青年期における主人公の少年と父親の対立をテーマとして日常の一場面を描いたものであった。そうした父親と息子の衝突は家族関係全体にも影響を及ぼしうるということも示唆されているだろうと指摘した。最後の、父親と息子の肉体的、精神的な力関係が逆転したというところがこの作品における重要な場面であるとし、そこに着目し論を展開した。これらを踏まえ、この作品にみられる父親と息子の関係について考察した。女性の方が男性に比べ、家庭内の関係を保とうとする傾向があるという論を引用し、この作品において母親にはそうした姿勢が見られるが、父親と息子には見られないと指摘した。また、父親と息子の対立について、その要因は息子の態度にあるということと、父親の態度も、息子の父親に対する態度に影響を与えており、双方が要因を生んでいるということも指摘した。

第四章では「垣根」について同様に作品分析を行った。この作品はオーケソン自身の経験をもとに描かれたものであることから、彼の当時住んでいた町と彼のそれに対する印象や感情を踏まえて考察した。この作品におけるテーマは少年の自立心の芽生えであると分析した。それは最後の垣根の外側の風景描写から読み取れるのではないかとし、将来町を出て、親から離れたたいという気持ちが芽生えているという少年の心理を考察した。また、母親について描写された箇所に着目し、父親と少年との間には無い、より深い繋がりのようなものを母親に対して少年は感じているのではないかと推測した。この場面では母親が少年の気持ちを察しているということ

が暗示されているのではないかと推測した。一方で父親は少年の気持ちの変化に気付いている様子はなく、少年は父親を置いて成長していくのであろう。

第五章では、「スキー旅行」について同様に作品分析を行った。この作品では両親の離婚後、主人公の少年が離れて暮らす父親を訪ねる場面が描かれている。二人の会話から、離れて暮らす二人の間にはわずかな距離が生じているということ指摘し、離婚後に親子の関係を維持することが容易いことではないことが読み取れると分析した。デンマークにおいて離婚率が高く、離婚後は母親と暮らす子どもが多いという事実を受け、それが要因で父親と子どもの関係が希薄になっているということ指摘した。そのような状況下の父親と子どもの在り方をテーマにした作品だと考察した。

第六章では、3作品を縦断的に考察した。3作品は共通して青年期における少年と父親の間に生じる葛藤や対立といった問題をテーマに描かれていた。そうした問題を引き起こす要因として、母親と子の関係と比較したときに指摘される、父親と子の希薄な関係性が挙げられることについて言及した。父親と青年期の息子の間において安定した関係を保つことは容易でなく、簡単に壊れたり脆くなったりしてしまうということとは、オーケソン自身の経験から得たテーマであるとともに、普遍的なテーマであると考えた。しかし、そのような関係性を問題として捉えているわけではなく、そのような状況を経験し少年は成長していくのだということが主たるメッセージとして込められているのではないかと推測した。時には父親と衝突し、時には父親から離れることで、少年は自らの進むべき道を模索し大人になっていく様が日常の風景の中に描かれている。また、3作品において、今後主人公がどのように成長していくか、その先は描かれていない。それが、彼の「多くを語らない」というスタイルであり、未知なるものへの探求心がそのようなスタイルを生んでいるのだろう。

最後に、オーケソンの作品について筆者の解釈をまとめた。オーケソンの作品には自身の抱いた感情が反映されており、それが描写されなくとも読み手が感じ取ることができたとき、オーケソンが執筆時に感じるという「幻肢痛に近いもの」、すなわち排除された感情を感じ取るという感覚が経験できるのだろう。